

奈良橋通り

小松宏佳

すれちがうベビーカーの
子に射ぬかれて
わたしの目は
先の歩道橋へ飛んだ
青い四つんばいの鉄骨は
魔人のように清楚だ
立ち上がれば
首のない怖さが哀しい

「きょうも、中川さんに褒め殺されたあ
デイサービスから帰ってくると
母は弾む声でぬり絵をみせてくれたっけ
色えんぴつの

花に

人に

動物に

極彩の筆圧がおどる
鮮やかな人生だったのか
願いだったのか
笑顔のむこうにあったものが吹いてくる

空に白い駱駝がくる
母を乗せたひとこぶ駱駝は首を伸ばすと
たちまち痩せて白骨体になり
散りぢりになった骨はのこらず
空が食べてしまった